柿生文化

柿生郷土史料館　情報・研究誌
住所:川崎市麻生区上麻生 6-40-1
柿生中学校内
電話:070-1503-6401/044-988-0004
http://web-asao.jp/hp2/k-kyoudo
第 161 号

かわさきの郷土史を読む１

山田蔵太郎著『川崎誌考』（その1）

川崎市教育委員会事務局文化財課学芸員　新井　悟

◆郷土史を読むこと◆

川崎に暮らした先人が書かれた郷土史はたくさんあります。郷土史には、そこに実際に生きた人びとの息づかいがあり、地域への愛があります。

ところが現在の学問分野からみると、郷土史は専門研究ではないので取り上げられることが少なく、いつのまにか忘れられてしまいます。たしかに郷土史を読むと、ある部分は歴史学や民俗学、考古学や地理学の方法を用いて書かれているのですが、ある部分は独自の取材や記録、記憶にもとづいて書かれています。これが原因となって個別の学問研究では扱われなくなってしまうのですが、実はこれが、郷土史の魅力なのです。そこには、個別の学問研究では掬（すく）えないものである、地域に対する思いも保存されています。

近年、地域を活性化させる様々な試みが行政だけではなく地域の様々な方々からもあり、そのような取組にも大きなヒントを与えるものがあるのではないかと考え、郷土史を取り上げることにしました。

これから1年間、「シリーズかわさきの郷土史を読む」として、様々な郷土史を紹介する予定です。内容としては麻生区を扱ったものを多くするつもりですが、第1回目と次回は、かわさきの郷土史の筆頭に位置づけられる山田蔵太郎著『川崎誌考』を取り上げます。

◆山田蔵太郎著『川崎誌考』◆

山田蔵太郎著『川崎誌考』は、1927（昭和2）年に刊行されました。

著者の山田蔵太郎氏（1868－1931）は、1868（慶応4）年2月29日に伊勢桑名藩士の子として越後の柏崎で生まれました。15 歳から 17 歳まで北海道に居住し、その後、1892（明治 25）年～1902（明治 35）年まで、栃木県烏山の日本ハリスト正教会で伝教者として従事するようになりました。1902（明治 35）年、東京市の教会に異動し、のちに正教会本会の青年会会長に就任しますが、1908（明治 41）年に、ニコライ大司教から解雇され、すぐに、横浜貿易新報に記者として勤務します。1931（昭和 6）年に横浜新潟県人会の役員として故郷訪問旅行中に新潟で倒れ、10 月 16 日に 64 歳で永眠しました。なお山田氏の経歴についてはこれまで詳しい情報が少なかったのですが、近年、郷土史を研究されている近藤政次氏の調査によって詳細が明らかになってきました。今回、略歴を書くにあたっては近藤氏の調査研究成果を参考にさせて頂きました（近藤 2015）。

『川崎誌考』は A5判、622 頁の大著です。収録された写真・挿図・挿表の類は、写真図版 24 枚（モノクロ）、挿図 34 枚、挿表 13 枚で、このうち写真図版と挿図に掲載された写真は、100 年前の川崎の姿を伝えて貴重です。序文には、自序にくわえ、人類学・考古学・民族学の分野で著名な鳥居龍蔵氏の「序言」と、初代川崎市長の石井泰助氏の「緒言」があり、この3つの「序」をもとに本書成立の経緯を復元するとおおよそ次のようになります。川崎市は、1924（大正 13）年に、川崎町・大師町・御幸村の二町一村が合併して市制施行したのが始まりで、その後合併をすすめ、1939（昭和 14）年に柿生村・岡上村を編入して、現在の姿になりました。これを強力に牽引したのが初代川崎市長の石井泰助氏です。石井氏は、川崎の「過去を知らないで、どうして又未来を知ることが出来ようぞ」という思いで川崎市史編纂（へんさん）の事業を企画し、1920（大正9）年に山田氏にこの編纂事業を依頼しました。本書には、まさに誕生期の川崎の熱い思いが詰まっています。

なお本書は、その後入手困難な稀覯本（きこうぼん）となっていたことから、1982（昭和 57）年に国書刊行会から、原本を復刻して刊行されました。この復刻には、川崎の地域史研究を長年牽引し『わが町の歴史・川崎』の著者でもある村上直氏（1925－2014）が解説を書かれ、「市域の発展のあとを述べた歴史書」のうち「基本書の第一に取り上げられるべきもの」と高く評価されています。さらに山田氏には、1930（昭和5）年に『稲毛川崎二ヶ領用水事績』（稲毛川崎二ケ領普通水利組合）の著作もあります（1982（昭和 57）年に国書刊行会より復刻再刊）。

今回は前書きが多かったですが、次回はこの『川崎誌考』の内容を詳しくご紹介します。

本シリーズで取り上げる本は現在では入手困難なものが殆どですが、それでは困るので、川崎市立図書館の蔵書もご紹介します。今回の『川崎誌考』は、1927（昭和2）年発行の版が9冊、1982（昭和 57）年に復刻再刊された版が 16 冊所蔵されています（2021（令和 3）年 8 月末時点）。貸出禁止になっているものが殆どですが、一部に貸し出せるものもあります。ご興味のある方は、ぜひご覧ください。

参考文献

近藤政次　2015「川崎の歴史考証に功績山田蔵太郎の素描」『歴研よこはま』73　横浜歴史研究会
山田蔵太郎　1927『川崎誌考』　石井文庫　※1982 年に国書刊行会から復刻再刊

鶴見川流域の中世
その 20 最終回

稲毛重成の人物像にせまる（その２）

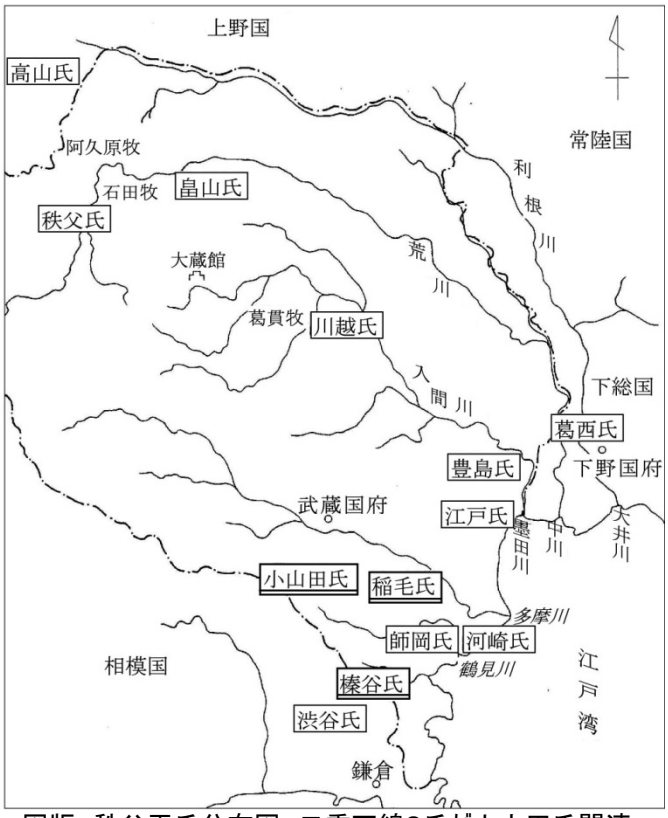
中西望介（戦国史研究会会員・都筑橘樹研究会会員）

ここでは秩父平氏の分布とその中における小山田、稲毛、榛谷等の小山田一族の位置を確認する。さらに源頼朝が小山田一族をどの様に処遇しているのかを見ることにする。

まず秩父平氏は「武蔵の党々」とよばれる猪俣・児玉・横山・丹・野与・村山・私市・西・綴などの郷地頭クラスの武士団とは異なる大武士団である。その所領は一郡または庄園規模の大きさである。また、秩父平氏は武蔵国留守所惣検校職という武蔵国の行政機関を指揮・統括する在庁官人の首位の地位を秩父重綱以来代々世襲している家柄であり、河越重頼・畠山重忠等がその職に就いている。稲毛重成が秩父氏の傍流であることを確認したい。

秩父平氏の分布については今野慶信氏の研究（「豊島氏の成立」）があるのでそれに学びながら見てみよう。秩父平氏は在庁官人のトップクラスである地位を利用して武蔵国内外に広く一族を配置している。その分布は荒川・入間川・多摩川・鶴見川などの大河川の流域や古代官道を継承した鎌倉街道などの幹線道路沿いに進出している。

荒川流域では荒川が秩父盆地から関東平野に出る畠山には畠山氏、その下流には長野氏。入間川流域では河越庄には秩父平氏の惣領家河越氏がいる。河越庄は古代官道の東山道武蔵路が貫通している。入間川下流にある豊島郡には豊島氏がいる。豊島郡岩渕は奥大道が入間川を渡る渡河点に位置する交通の要衝である。江戸氏は海上交通と鎌倉下道の接点に本拠を構えている。多摩川中流域では小沢郷の小沢氏、その下流には稲毛庄の稲毛氏がいる。稲毛庄は古東海道の後身である中原街道が貫通している。河口付近には河崎庄の河崎氏がいる。鶴見川流域では小山田保に小山田氏、中山の中山重実、小机保の小机（河崎）基家・重家、師岡保の師岡氏がいる。鶴見川の西側には位置する榛谷御厨には榛谷重朝がいる。さらに、秩父平氏は近隣諸国に進出して、鎌倉街道上道沿いの上野国高山御厨には高山氏が、中原街道沿いの相模国渋谷庄には渋谷氏が、入間川・古荒川・古利根川・太日川が流れ込む下総国葛西御厨には葛西氏がいる。このように秩父平氏は河川の渡河点や港湾や陸上交通の要衝につぎつぎと一族を進出させるという意図をもっていたと考えられる。



図版　秩父平氏分布図　二重下線3氏が小山田氏関連
今野慶信「豊島氏の成立」より一部加筆修正して転載

ことに小山田一族は武蔵国府と鎌倉を結ぶ鎌倉上道沿いに小山田保（庄）には小山田有重、小沢郷には重成子息の小沢重政、榛谷御厨には重成の弟榛谷重朝とその所領が分布している。この一族が鎌倉上道沿いに南下する意図をもっていることが読み取れる。秩父平氏の中にあって稲毛重成等小山田一族の所領が鎌倉に最も近接していることを確認したい。

先に秩父平氏が交通の要衝に一族を配置した事を見たが、吉富郷は鎌倉街道上道が多摩川を渡河して武蔵国府に至る交通の要衝である。この土地は平弘貞の所領であるが、稲毛重成が自分の所領として申告した背景には鎌倉街道上道の交通・流通に関わる何らかの権益を有していたとも考えられる。

さて鎌倉の主である源頼朝は稲毛重成・榛谷重朝兄弟をどの様に処遇したのであろうか。畠山重忠の処遇と対比しながら見る事にしよう。挙兵にあたり稲毛重成が平家方として頼朝に敵対した事は先に記した。治承四年（1180）八月二六日には従弟の畠山重忠は河越重頼や江戸重長等とともに頼朝に味方した三浦義明を衣笠城に攻めて討ち取っている。やがて頼朝は上総広常や千葉常胤の来援を得て勢力を盛り返し隅田川の長井渡まで進むと、同年十月四日には畠山重忠・河越重頼・江戸重長等は頼朝の元に参陣している。頼朝は「有勢の輩を抽賞せざれんばことなり難からんか」と秩父平氏の臣従を受け入れて、三浦一族に対しては畠山重忠等に憤りを残さぬように伝えている。同月六日、多くの軍勢を率いて頼朝は鎌倉に入っているが、この時の先陣は畠山重忠が勤めている。榛谷重朝は稲毛重成より早く『吾妻鏡』に登場する。榛谷重朝は下河辺行平・結城朝光・三浦義連らと共に弓箭に秀でて信頼のおける人物として頼朝の寝所の警護役に任命されている（『吾妻鏡』養和元年（1181）四月七日条）。同年同月二十日、稲毛重成は虚偽の申告をしたとして頼朝の勘気に触れて篭居している。この勘気もやがて解かれたようで、翌年には金洗澤辺で牛追物が行われた時に下河辺行平・愛甲季隆らと共に頼朝から褒美の品を賜っている。重成が弓矢の達人であったことがわかる。頼朝は畠山重忠には先陣の栄誉を、榛谷重朝には信頼の証としての宿直役を、重成には恐怖心を与えたくみに競争心を煽り操ろうとした。これ以後も幕府内部における重忠と重成の地位は重忠が優位、重成は二番手の立場に置かれて代わる事はなかった。（完）

＊鶴見川流域の中世をテーマに近世初期まで書くつもりでいたがここで終わりとする。

シリーズ
教育の歩み 第３部

日本の学校と教育（17）

小林 基男（柿生郷土史料館専門委員）

◆「修身」と「歴史」◆

教科としての「修身」は、学制が公布されると同時に、読み、書き、算数、修身が教えるべき内容として明記されていました。しかし、この段階での扱いは、とってつけたように全授業の3％程度のウェートしかもっていなかったのです。

「修身」重視の傾向がはっきりと示されるのは、明治13（1880）年に発表された改正教育令からです。そこでは学ぶべき学科の冒頭に「修身」が置かれ、次いで「読書」「習字」「算術」「唱歌」「体操」が示され、4年生になると「地理・歴史」が入ってきます。当然「修身」の週当たり授業数も大幅に増え、「修身」重視が明確に打ち出されたのです。この段階で下等小学校（後の尋常小学校）での「修身」の重視は、社会生活での行儀と教室での授業態度に関する躾の意味づけが大きく、教室での学びに集中して、読み書き算数をしっかり身に着け、社会に役に立つ人になるよう、社会生活のルールと学校生活の決まりを子ども達に教え込むことにありました。ですから、この時点ではまだ天皇を敬う心の涵養を特に重視することは、まだ明確にされていなかったのです。明治17（1884）年の秩父事件を受けて、翌年からは天皇陛下の偉大さに対する言及が増えますが、明治23（1890）年10月「教育勅語」が発表されるに及んで、「修身」の授業を中心に、歴代天皇がいかに民を思い、民の暮らしに配慮してきたかが、これでもかというほど、子ども達に摺りこまれるようになっていったのです。

日露戦争前後の「修身」教科書、右の表紙は高等小学校 4 年生用、左の本文は尋常小学校 4 年生用（琴平神社史料館蔵）

戦時下の中学校 2 年生用、「修身」教科書の目次（琴平神社史料館蔵）

高等小学校 1 年生（現在の小学校 5 年生に相当）用の日本史教科書　建国神話の神武天皇の記述から始まります（琴平神社史料館）

堺市北部の世界遺産「百舌鳥古市古墳群」に、宮内庁によって仁徳天皇陵と指定された、日本最大の古墳があります。この古墳について、「修身」の時間を使って、子ども達に次のように説明されたのです。仁徳天皇は、常に民の暮らしを第一に考え、ご自分や皇子たちには、民の為に我慢することを説いた。そのため天皇の死後、民は天皇への感謝の念を表わすべく、労をいとわずあの巨大な墳墓を作り上げたのだと。では、仁徳天皇はどのようなことをなさったのか。子供たちはこう教えられました。即位4年目、民情視察に出た天皇は、夕暮れ時に難波の国を一望する山に立って下界を見下ろし、どの家からも夕餉の煙がたちのぼっていないことに気付き、不審に思って家臣に事情を調べさせると、飢饉で食べるものがないためと分かり、直ちにその年1年の年貢を免除し、さらに労役も中止されたのです。1 年後天皇は再び山に登って、この年も年貢と労役を免除され、さらにその翌年と3年にわたって年貢と労役を一切免除して、飢饉の傷が全て癒えたと思われる4年目から、3年をかけて徐々に課税ベースを元に戻された。その間、宮殿の雨漏りも直さないまま、天皇ご一家は一部が壊れたお屋敷でお過ごしになられた。こういう根拠の怪しい説話が、堂々と教科書に乗せられたのです。聖徳太子伝説にいたっては、いうまでもないでしょう。

このようにして、天皇ご一家がいかに民を思い、民の生活の安寧を心がけているかを、子供たちに摺りこみ、いやしくも天皇陛下に歯向かうなどと考えないように仕向けたのです。さらに歴史の時間を使って、神話の世界から現在（明治時代）までの、天皇の事績を誇張して並べ立てたのです。その上、天皇制にとって都合の悪い史実は全て切り捨て、割愛したのです。天智天皇の息子の大友の皇子と同帝の弟大海人皇子（後の天武天皇）が皇位継承を巡って内戦を演じた壬申の乱はなかったことにされ、後醍醐天皇が吉野に逃れて立てた南朝と北朝の対立、いわゆる南北朝の対立も記されないのです。歴代天皇の事績とされることが、次々に記され、歴代天皇の名を暗誦することが義務付けられたのです。現在でも80代半ば以上でお元気な皆様は、神武天皇以下歴代天皇の名を、澱みなく暗誦することがお出来になるのではないでしょうか。こうして、「修身」と「歴史」の時間を使って小学生たちは、徹底的に天皇を神格化し、同時に絶対視することを摺りこまれていったのです。

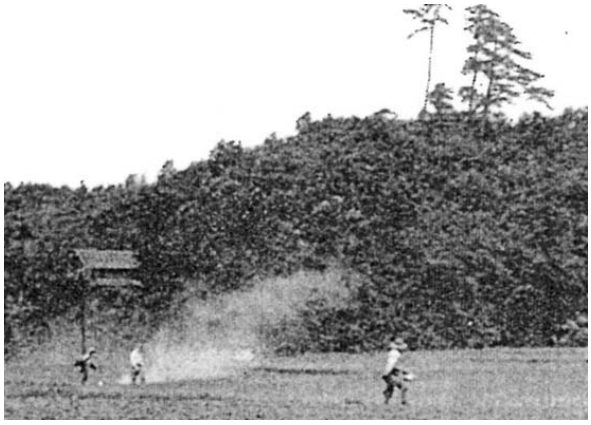
続く

誌上特別展

写真で見るふるさとの原風景（3）上/下麻生・真福寺

上麻生山口台を望む

勧銀造成前昭和 30 年頃の真福寺谷戸



昭和 30 年頃の真福寺市営住宅付近

下麻生住宅付近

下麻生踊場ポンプ場から早野方面

改修前の鶴見川上流

柿生郷土史料館催物案内 【参加自由、入場無料】

◎開館日:奇数月は毎日曜日、偶数月は毎土曜日　（原則として月4回）

11　**10月**　2・9・16・30 日（毎土曜日）　**11月**　7・14・21 日（毎日曜日）

◎開館時間:午前10時～午後3時（緊急事態宣言、蔓延防止等重点措置宣言下では休館です）

第19回 特別企画展

写真で見るふるさとの原風景

戦後における村々の変貌の過程や、各地の開発の様子など、柿生地区村々の変遷の様子をお楽しみください。期間については蔓延防止等重点措置が延長された場合、宣言解除まで再延期します。

期間　10 月 2 日（土）～ 1月 30 日（日）　　会場　柿生郷土史料館特別展示室